見所斷の隨眠における貪・瞋・慢・無明の史的背景について

藤本　庸裕

1. 問題の所在

佛教徒は修行の究極的な目標である解脱を、直接的には心が煩悩より解き放たれることであると見做している(1)。この限りで、煩悩を斷じること、または煩悩を斷じうる無漏の智慧を生起せしめることが解脱に至る爲に必要となる。では、解脱に至るにはどのような煩悩を斷じなければならないのか。この點に關して、インド佛教の中で有力な一學派であった說一切有部（以下、有部）は、解脱に至る修行道において斷じられねばならない根本的な煩悩として、九十八隨眠という體系的な煩悩群を打ち立てた。この有部の九十八隨眠は、阿含・ニカーヤに說かれる七隨眠（欲貪・瞋・有貪・慢・疑・見・無明）をその主要な素材とし、實質的にはその七隨眠に幾らかの變容を加えた十隨眠（貪・瞋・慢・無明・有身見・邊執見・邪見・見取・戒禁取・疑）を三界（欲界・色界・無色界）と五部（見苦所斷・見集所斷・見滅所斷・見道所斷・修所斷）とに特定の仕方で配分することで成り立っている(2)。このうち三界への配分の仕方は、上二界（色界・無色界）に瞋が無いことを除き全て同一である。一方、五部への配分の仕方は欲界の場合を例に取ると、次のようになっている。

・見苦所斷の隨眠　　貪・瞋・慢・無明・有身見・邊執見・邪見・見取・戒禁取・疑

(1)　阿含・ニカーヤ及び說一切有部の解脱觀については、加藤［1985: 151-162］を參照。
(2)　阿含・ニカーヤの七隨眠及びその九十八隨眠への展開に關する先行研究については、櫻部［1955］、Frauwallner［1971: 73-81］、池田［1980］を參照。特に、七隨眠から十隨眠へ至る過程については田中［1993: 307-309］を參照。

・見集所斷の隨眠　　貪・瞋・慢・無明・邪見・見取・疑
・見滅所斷の隨眠　　貪・瞋・慢・無明・邪見・見取・疑
・見道所斷の隨眠　　貪・瞋・慢・無明・邪見・見取・戒禁取・疑
・修所斷の隨眠　　貪・瞋・慢・無明

この五部の隨眠のうち、見苦所斷ないし見道所斷の四部の隨眠は、最初の聖者の位である見道において、苦諦・集諦・滅諦・道諦の四諦を順次正しく觀察することによって斷じられる隨眠であり、總じて見所斷の隨眠と呼ばれている。一方、修所斷の隨眠は、見道より後の修道において修習（四諦を繰り返し觀察すること）によって斷じられる隨眠である。九十八隨眠がこのような見所斷と修所斷との二種の隨眠から構成されていることは、それが見道と修道という修行道の構成に應じて作られたものであることを示している。

この九十八隨眠の形成の事情を考える場合、最大の問題となるのは、各隨眠が如何なる考え方によって五部に配されているのかということである。差し當たり、貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠に着目すると、この四つは五部の隨眠全てに、卽ち見所斷の隨眠と修所斷の隨眠の兩方に配されている。では、何故に見道において斷じられるものが修道においても斷じられねばならないのか。卽ち、貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠は如何なる考え方の下に見所斷と修所斷の雙方に配されているのかを說明しなくてはならない。この問題に關連して、本稿では七隨眠とは別の阿含・ニカーヤの煩惱說に着目し、九十八隨眠形成の背景について考察を行うことにしたい。何故なら、上記の五部の隨眠における貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠の位置付けは、阿含・ニカーヤからの史的發達という觀點から見た場合、一層重要な問題となるからである。

2. 阿含・ニカーヤの教說との關係について

有部の修行道に關する教說において、九十八隨眠はその斷じた隨眠の數が預流・一來・不還・阿羅漢といった聖者の行位を決定する際の基準となっている。卽ち、修行者は見所斷の隨眠を斷じることで預流果を獲得し(3)、次に欲界の上上品から中下品に至る六品の修所斷の隨眠を斷じることで一來果を獲得し(4)、

次に欲界の下上品から下下品に至る殘り三品の修所斷の隨眠を斷じることで、つまり欲界の九品の修所斷の隨眠全てを斷じることで不還果を獲得する(5)。最後に上二界の修所斷の隨眠を有頂地の下下品に至るまで斷じることで、つまり三界の隨眠を全て斷じることで阿羅漢果を獲得する(6)。この行位とその獲得の爲に斷じられるべき煩惱（隨眠）との對應關係を纏めると以下のようになる。

・預流果　　見所斷の隨眠の斷
・一來果　　欲界の上上品ないし中下品の六品の修所斷の隨眠の斷
・不還果　　欲界の下上品ないし下下品の三品の修所斷の隨眠の斷
・阿羅漢果　上二界の修所斷の隨眠の斷

このような聖者の行位が斷じられた煩惱の種類によって決定されるという考

（3） AKBh 355, 19-356, 1: evaṃ navaprakāreṣu kleśeṣu sarvatra **akṣīṇabhāvanāheyaḥ phalasthaḥ saptakṛtparaḥ** / (6.34ab) yasya hi phalasthasyaiko 'pi bhāvanāheyaḥ prakāro 'prahīṇaḥ sa srotaāpannaḥ（以上の如き［上上品ないし下下品の］九品の一切の煩惱のうち、修所斷［の煩惱］を未だ滅していない、果に住する者は極七反［生］である。(6.34ab) もし果に住する者において、修所斷［の煩惱］が一品も斷じられていないならならば、その者は預流である）。以下、本論文に用いた AKBh の和譯には、小谷・本庄［2007］、櫻部・小谷［1999］を適宜參照した。

（4） AKBh 357, 22-358, 1: **kṣīṇaṣaṣṭhaprakāras tu sakṛdāgāmy asau punaḥ** // (6.35cd) dvitīya-phalaprāpto bhavati（一方、さらに［欲界の］第六品（中下品）［の修所斷の煩惱］を滅している、この者（果に住する者）は一來である。(6.35cd)［つまり、］第二果（一來果）を得た者となる）。

（5） AKBh 358, 14-15: **so 'nāgāmī navakṣayāt** // (6.36d) sa eva punaḥ phalastho navaprakāra-prahāṇād anāgāmy upadiṣṭaḥ（その者（果に住する者）は、［欲界の］九［品の修所斷の煩惱全て］を滅することにより不還である。(6.36d) さらに、その同じ、果に住する者は、［欲界の］九品［の修所斷の煩惱全て］を斷じることにより不還であると說かれる）。

（6） AKBh 365, 9-14: yas tv asau bhāvāgriko navamaḥ prakāra ukto yasya vajropamena prahāṇaṃ **tatkṣayāptyā kṣayajñānaṃ ... aśaikṣo 'rhann asau tadā** (6.45ab) utpanne ca punaḥ kṣayajñāne so 'rhattvapratipannako 'śaikṣo bhavaty arhaṃś cārhattvaphalaprāptaḥ（一方、この有頂［地］に屬する第九品［の修所斷の煩惱］と言われるものは、金剛喩［定］によって斷じられるが、そ［の第九品の修所斷の煩惱の］滅の得と［同時に］盡智がある。..... その時、この者は無學の阿羅漢である。(6.45ab) さらにまた、盡智が生じた時、その阿羅漢向は無學となり、阿羅漢性という果を得た阿羅漢と［なる］）。

え方は、阿含・ニカーヤにその起源を求めることができる。例えば說一切有部所傳とされる『雜阿含經』では、聖者の行位について次のように說かれている。

『雜阿含經』T2, 298c29-299a7: 有四沙門果。何等爲四。謂、須陀果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果。何等爲須陀果。謂、三結斷、是名須陀果。何等爲斯陀含果。謂、三結斷、貪・瞋・癡薄、是名斯陀含果。何等爲阿那含果。謂、五下分結斷、是名阿那含果。何等爲阿羅漢果。若彼貪欲永盡、瞋恚永盡、愚癡永盡、一切煩惱永盡、是名阿羅漢果。

四つの沙門果がある。何を四つ［の沙門果］とするのか。預流果・一來果・不還果・阿羅漢果である。何を預流果とするのか。三結（有身見・戒禁取・疑）の斷を預流果とする。何を一來果とするのか。三結の斷と貪・瞋・癡が弱められることを一來果とする。何を不還果とするのか。五下分結（有身見・戒禁取・疑・貪・瞋）の斷を不還果とする。何を阿羅漢果とするのか。もしか［の修行者］の貪欲が永盡し、瞋恚が永盡し、愚癡が永盡し、一切の煩惱が永盡すれば、これを阿羅漢果とする。

上記の教說によれば、預流・一來・不還・阿羅漢という四つの行位のそれぞれに到達する爲の條件として、特定の種類の煩惱を斷じることが規定されている。卽ち、この行位の順序に從えば、修行者は最初に有身見・戒禁取・疑の三結を斷じて預流果を獲得し、次に三結を斷じることに加えて貪・瞋・癡が弱められることで一來果を獲得する。次に有身見・戒禁取・疑・貪・瞋の五下分結を斷じて不還果を獲得し、最後に貪・瞋・癡の三つとその他一切の煩惱を永盡して、卽ち斷じて阿羅漢果を獲得する。この行位とその獲得の爲に斷じられるべき煩惱との對應關係は以下のように纏められる。

・預流果　　三結（有身見・戒禁取・疑）の斷
・一來果　　三結の斷と貪・瞋・癡が弱められること
・不還果　　五下分結（有身見・戒禁取・疑・貪・瞋）の斷
・阿羅漢果　貪・瞋・癡とその他一切の煩惱の斷

このような行位を得る爲に斷じられるべき一連の煩惱(7)には、次のような區分が認められよう。卽ち、この一連の煩惱のうち、預流果を得る爲に斷じられる煩惱は有身見・戒禁取・疑の三結であるが、一來果ないし阿羅漢果を得る爲に弱められる、または斷じられる煩惱を、先の三結を除いて一纏めにすれば貪・瞋・癡の三つとなる。このように上記の一連の煩惱は、煩惱の違いに基づいて、預流果を得る爲に斷じられる煩惱（卽ち、三結）と一來果ないし阿羅漢果を得る爲に弱められる、または斷じられる煩惱（卽ち、貪・瞋・癡）との二つに大きく分けられる。こうした煩惱の區分は、先に見た有部の教說における煩惱の區分、卽ち見所斷の隨眠が預流果を得る爲に斷じられる煩惱であり、修所斷の隨眠が一來果ないし阿羅漢果を得る爲に斷じられる煩惱であるという二種の煩惱の區分に一致する。この阿含・ニカーヤの教說と有部の教說における煩惱の區分の對應關係を示すと以下のようになる。

	〈阿含・ニカーヤの教說〉	〈有部の教說〉
・預流果	三結（有身見・戒禁取・疑）の斷	見所斷の隨眠の斷
・一來果	貪・瞋・癡が弱められること	修所斷の隨眠（欲界の上上品ないし中下品の六品）の斷
・不還果	貪・瞋の斷（五下分結の斷）	修所斷の隨眠（欲界の下上品ないし下下品の三品）の斷
・阿羅漢果	貪・瞋・癡とその他一切の煩惱の斷	修所斷の隨眠（上二界の修所斷の九品全て）の斷

結と隨眠の相違は措いて、この區分に基づいて兩說の個々の隨眠を比較すれば、有身見・戒禁取・疑の三つは全て見所斷の隨眠に含まれ、また、貪・瞋・癡の三つは慢が無いことを除いて修所斷の隨眠と一致する。この對應關係から

（7） 阿含・ニカーヤにおいて、四つの行位とその行位を得る爲に弱められる、または斷じられる煩惱とが纏まって說かれる場合、この一連の煩惱のうち、預流・一來・不還（パーリでは化生）となる爲に弱められる、または斷じられる煩惱については決まった形で見られるが、阿羅漢果を得る爲に斷じられる煩惱については相違があり、多くの場合は三漏（欲漏・有漏・無明漏）が斷じられるとされる。本文で擧げた例と同じく、貪・瞋・癡の三つを擧げる例は、他に『雜阿含經』T2, 205c5-6 に見られるのみであり、ニカーヤには見られない。但し、個別的に阿羅漢を說明する際に貪・瞋・癡の三つの永盡を用いる例は SN4 252, 13ff.（『雜阿含經』T2, 126b27ff.に對應）に見られる。

判斷すれば、阿含・ニカーヤにおける三結と貪・瞋・癡の三つの煩惱が、それぞれ增廣される形で(8)、有部の教說における見所斷の隨眠と修所斷の隨眠とに整備されたと考えられる。

このように有部の九十八隨眠は、阿含・ニカーヤの行位に關わる煩惱說にもその起源を見出すことができるが、ここで特に注目したいのは、阿含・ニカーヤにおいては貪・瞋・癡（無明）の三つは預流果を得る爲に斷じられるべき煩惱に含まれていないのに對し、有部の教說においては見所斷の隨眠にも含まれていることである。この阿含・ニカーヤの教說における貪・瞋・癡の位置付けを念頭に置いて有部の教說を見れば、慢や無明等の個別的な煩惱の問題は殘るものの、この貪・瞋・癡に由來すると見られる貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠は本來、預流果を獲得してより後に斷じられる煩惱、つまり修所斷の隨眠に相當する煩惱であって、有部が九十八隨眠を整備する際に何らかの理由により預流果を得る爲に斷じられる煩惱、つまり見所斷の隨眠にも含められたのではないかと推測される。このことは、貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠が見所斷の隨眠の中でその他の隨眠から區別され、副次的な位置付けを與えられていることを考え合わせれば、一層妥當性の高い推測であると思われる。では、その副次的な位置付けとは具體的にどのようなものか、次節で檢討する。

3. 見所斷の隨眠における貪・瞋・慢・無明の位置付けについて

見所斷の隨眠における貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠の位置付けを考えるには、遍行（sarvatraga）(9)と非遍行（asarvatraga）(10)、無漏緣（anāsravālambana）と有漏緣（sāsravālambana）(11)という下位分類に着目する必要がある。この分類に從えば、以下に示すように、見苦所斷ないし見道所斷の四部の隨眠はそれぞれ主に貪・瞋・慢・無明の四隨眠とその他の隨眠とに區別されるからである。

・見苦所斷の遍行の隨眠　　有身見・邊執見・邪見・見取・戒禁取・疑・

（8）　修所斷の隨眠の中に慢が付加されている背景には、七隨眠中の慢や五上分結（色貪・無色貪・掉擧・慢・無明）中の慢が影響している可能性がある。

	無明（不共・相應）
・見苦所斷の非遍行の隨眠	貪・瞋・慢・無明（相應）
・見集所斷の遍行の隨眠	邪見・見取・疑・無明（不共・相應）
・見集所斷の非遍行の隨眠	貪・瞋・慢・無明（相應）
・見滅所斷の無漏緣の隨眠	邪見・疑・無明（不共・相應）
・見滅所斷の有漏緣の隨眠	貪・瞋・慢・無明（相應）・見取
・見道所斷の無漏緣の隨眠	邪見・疑・無明（不共・相應）

（9） AKBh 286, 18-287, 1: **sarvatragā duḥkhahetudṛggheyā dṛṣṭayas tathā / vimatiḥ saha tābhiś ca yāvidyāveṇikī ca yā** // (5. 12) duḥkhasamudayadarśanaprahātavyā dṛṣṭayo vicikitsā ca tābhiś ca saṃprayuktāvidyāveṇikī ca [(1] duḥkhasamudayadarśanaprahātavyaivāvidyā[1)]. itīma ekādaśānuśayāḥ sabhāgadhātusarvatragāḥ. sapta dṛṣṭayo dve vicikitse dve 'vidye sakalasvadhātvālambanatvāt ([(1)]duḥkhasamudayadarśanaprahātavyaivāvidyā conj. [Tib. P273a2-3/D233b1-2: sdug bsngal (P; bsngal ba D) dang kun 'byung mthong bas spang bar bya ba'i ma rig pa (D; / P) ma 'dres pa kho na ste; 眞諦譯 T29, 255b16-17: 獨行無明皆見苦集所滅] : duḥkhasamudayaprahātavye cāvidyā AKBh.) （苦［諦］あるいは因（集）［諦］を見ることで斷じられる諸の見と、同樣に、［苦諦あるいは集諦を見ることで斷じられる］疑とこれら（諸見と疑）と俱なる無明なるものと不共の［無明］なるものとが遍行（sarvatraga）である。(5. 12) 見苦・［見］集所斷の諸の見と疑とこれら（諸見、疑）と相應する無明と、見苦・［見］集所斷の不共の無明と、以上これら十一隨眠、［つまり］七つの見と二つの疑と二つの無明とが、［三界の中の］同類の界に遍行するものである。［これらは］自界全てを所緣とする（sakalasvadhātvālambana）からである）。この中、不共の無明とは、他の隨眠とは相應せず單獨で生起する無明を指す。

（10） 非遍行隨眠は遍行隨眠以外の隨眠を指す。なお、見苦・見集所斷の無明のうち、非遍行隨眠と相應する無明は非遍行隨眠となる。『品類足論』T26, 702c8-12（『衆事分阿毘曇』T26, 637c10-13）: 見苦集所斷無明隨眠、或是遍行、或是非遍行。……云何非遍行。謂、見苦集所斷非遍行隨眠相應無明。

（11） AKBh 288, 4-8: **mithyādṛgvimatī tābhyāṃ yuktāvidyātha kevalā / nirodhamārgadṛggheyāḥ ṣaḍ anāsravagocarāḥ** // (5. 14) nirodhadarśanaprahātavyās trayo 'nuśayā mithyādṛṣṭir vicikitsāvidyā ca tābhyāṃ saṃprayuktāveṇikī ca. mārgadarśanaprahātavyā apy eta eva traya ity ete ṣaḍ anāsravālambanāḥ. śeṣāḥ sāsravālambanā iti siddham（滅［諦］あるいは道［諦］を見ることで斷じられる、［それぞれの］邪見と疑と、そしてそれら（邪見と疑）と相應する無明あるいは單獨［の無明］という六つは、無漏［法］（道諦と滅諦）を對象領域とする（anāsravagocara）。(5. 14) 見滅所斷の三隨眠は邪見と疑と無明であり、［なお、その無明には］それら（邪見と疑）と相應する［無明］と不共［の無明］とがある。見道所斷［の隨眠］もまた同じこの三［隨眠］である。以上のこれら六［隨眠］が無漏［法］を所緣とする（anāsravālambana）。殘り［の全ての隨眠］は有漏［法］を所緣とする（sāsravālambana）ということが［自ずから］成立する）。なお、見滅・見道所斷の無明のうち、有漏緣の隨眠と相應する無明は有漏緣の隨眠となる。『品類足論』T26, 703a17-19（『衆事分阿毘曇』T26, 638a19-21）: 見滅道所斷無明隨眠、或有漏緣、或無漏緣。云何有漏緣。謂、見滅道所斷有漏緣隨眠相應無明。

・見道所斷の有漏緣の隨眠　　貪・瞋・慢・無明（相應）・見取・戒禁取

この分類は、九十八隨眠の分類が初めて明確に現れる『品類足論』（紀元前二世紀頃）に説かれ(12)、また既に『識身足論』（紀元前三世紀頃）にも用いられていることからして、九十八隨眠説と密接不可分の分類であると考えられる。見所斷の隨眠における貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠は、この見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・見道所斷の有漏緣の隨眠に一致するから、この貪・瞋・慢・無明の四隨眠の位置付けを知るには、その遍行等の分類の基準を明らかにすればよい。そしてその基準は、「無漏緣」（無漏［法］を所緣とするもの）、「有漏緣」（有漏［法］を所緣とするもの）、「遍行」（あらゆる所（有漏法または五部の法という所緣）に行き渡るもの）、「非遍行」（遍行ではないもの）という語がその隨眠の所緣を表していることから分かるように、隨眠の所緣に關係する。また「所斷」という語が示すように、隨眠の斷じられ方もその分類の基準となる。これは後に見るように、隨眠の斷じられ方はその所緣の取り方と密接な關係があることによる。從って、以下、見苦・見集所斷の遍行隨眠と非遍行隨眠、見滅・見道所斷の無漏緣の隨眠と有漏緣の隨眠について、各々の所緣及び斷じられ方の二點を確認し、それらの隨眠の位置付けを考察する。

この見所斷の隨眠のうち、見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・見道所斷の有漏緣の隨眠については、既に拙稿にてその所緣と斷じられ方の二つを論じた(13)。その結論を記せば、有部の教説において本來これらの隨眠はそれぞれ、自地（自界）に屬する自部の法（主に自部の遍行隨眠または無漏緣の隨眠）を所緣とし(14)、その所緣が斷じられることで斷じられる隨眠であると理論的に考えられていた。具體的には次の通りである。

(12)　遍行と非遍行の分類については、『品類足論』T26, 702c7-24（『衆事分阿毘曇』T26, 637c8-26）、無漏緣と有漏緣の分類については、『品類足論』T26, 703a16-b4（『衆事分阿毘曇』T26, 638a18-b6）を參照。『品類足論』では個々の隨眠の名稱を擧げてはいないものの、遍行と非遍行、無漏緣と有漏緣にそれぞれ分類される隨眠の數が AKBh の教説と一致するから、この分類は『品類足論』の時點で既に完成していたと見てよい。

(13)　藤本［2014］を參照。

・見苦所斷の非遍行隨眠は、自地（自界）に屬する見苦所斷の法（主に見苦所斷の遍行隨眠）を所縁とし、所縁が斷じられることで斷じられる。
・見集所斷の非遍行隨眠は、自地（自界）に屬する見集所斷の法（主に見集所斷の遍行隨眠）を所縁とし、所縁が斷じられることで斷じられる。
・見滅所斷の有漏縁の隨眠は、自地（自界）に屬する見滅所斷の法（主に見滅所斷の無漏縁の隨眠）を所縁とし、所縁が斷じられることで斷じられる。
・見道所斷の有漏縁の隨眠は、自地（自界）に屬する見道所斷の法（主に見道所斷の無漏縁の隨眠）を所縁とし、所縁が斷じられることで斷じられる。

一方、見苦・見集所斷の遍行隨眠と見滅・見道所斷の無漏縁の隨眠については、次に示す AKBh の隨眠の斷じられ方に關する規定より、その所縁及び斷じられ方を知ることができる。

AKBh 319, 20-320, 1: darśanaheyānāṃ tāvat

ālambanaparijñānāt tadālambanasaṃkṣayāt / ... ca (5. 60abc)

tatrālambanaparijñānād duḥkhasamudayadarśanaheyānāṃ svabhūmyālambanānāṃ anāsravālambanānāṃ ca. tadālambanasaṃkṣayād visabhāgadhātusarvatragāṇām. tadālambanā hi sabhāgadhātusarvatragāḥ. teṣu prahīṇeṣu te 'pi prahīṇā bhavanti.

まず、見所斷［の煩惱］は、

所縁を遍知することによって、それを所縁とする［煩惱］が滅することによって、……［滅せられるの］である。(5. 60abc)

そ［の三つ條件］の中、所縁を遍知することによって、自地を所縁とする、見苦・［見］集所斷の［煩惱］と、［見滅・見道所斷の］無漏縁［の煩惱］とが［滅せられる］。それを所縁とする［煩惱］（能縁）が滅

(14) 見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・見道所斷の有漏縁の隨眠がそれぞれ主に自部に屬する遍行隨眠または無漏縁の隨眠を所縁とするというのは、それが基本となる所縁の取り方であることによる。この所縁の取り方に基づいて、その他の自部の法（例えば、自部の非遍行隨眠または有漏縁の隨眠）という所縁の取り方が導き出されるからである。

することによって、異類の界に遍行する［煩悩］が［滅せられる］。何故なら、それ（異類の界に遍行する煩悩、即ち他界遍行隨眠）を所縁とする［煩悩］は、同類の界に遍行する［煩悩］（自界遍行隨眠）であり、そ［の同類の界に遍行する煩悩］が斷じられたとき、そ［の異類の界に遍行する煩悩］もまた斷じられるからである。

見道において修行者は、最初に苦法智忍、次に苦法智を起こして欲界の苦諦を觀察し、その後に苦類智忍、次に苦類智を起こして上二界の苦諦を觀察するという次第で、三界の四諦を順次觀察していく(15)。見苦所斷ないし見道所斷の隨眠は、苦諦ないし道諦を見ることで斷じられるものであるから、自地（自界）を所縁とする見苦・見集所斷の遍行隨眠と見滅・見道所斷の無漏縁の隨眠は、それぞれ自地（自界）の苦諦・集諦と滅諦・道諦を所縁とし(16)、その同じ所縁である苦諦・集諦と滅諦・道諦を遍知することによって、即ち苦法智忍を初めとする無漏の智慧で觀察することによって斷じられる隨眠であることが分かる(17)。但し、欲界繫の他界遍行隨眠(18)は斷じられる時にその所縁（上二界の苦諦または集諦）と無漏の智慧で觀察する對象（欲界の苦諦または集諦）とが一致しないので、上記の斷じられ方は適用できない。そこで、能縁の隨眠、即ちこの欲界繫の他界遍行隨眠を所縁とする自界遍行隨眠が斷じられること

(15)　見道の四諦現觀の次第については、AKBh 350, 1-351, 8 を參照。

(16)　無漏縁の隨眠の所縁の詳細については、AKBh 288, 9ff.を參照。

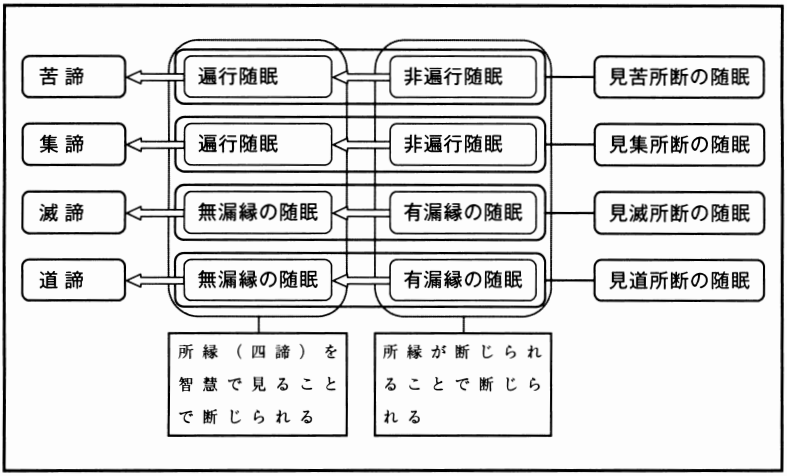
(17)　所縁を遍知するというのは、智慧によって隨眠の所縁を觀察するという意である。見滅・見道所斷の隨眠の斷じられ方は、古くは『發智論』T26, 921a22-26 の議論に窺うことができる。そこでは見滅・見道所斷の無漏縁の隨眠と有漏縁の隨眠の斷じられ方を巡って議論が展開されており、このうち無漏縁の隨眠の斷じられ方について、『婆沙論』T27, 113c10 では「要因慧見煩惱所縁隨眠方斷（必ず智慧で煩惱の所縁を見ることによって初めて隨眠は斷じられる）」と注釋する。また『順正理論』T29, 649c18ff.でも、所縁を遍知することで斷じられるという隨眠の斷じられ方は、智慧で隨眠の所縁を觀察することで斷じられるという隨眠の斷じられ方と同義に用いられている。

(18)　十一の遍行隨眠のうち、有身見と邊執見を除いた九つの遍行隨眠は自地（自界）に屬する法のみならず、上地（上界）に屬する法をも所縁としうる。欲界繫の他界遍行隨眠とは、上地（上界）に屬する法（梵天等）を所縁とする場合の欲界繫の遍行隨眠である。この他界遍行隨眠については、AKBh 287, 9ff.を參照。

で、所縁である欲界繫の他界遍行隨眠が斷じられるとされる(19)。この他界遍行隨眠の問題は殘るものの、總じて言えば、見苦・見集所斷の遍行隨眠と見滅・見道所斷の無漏縁の隨眠は、その所縁及び斷じられ方において、四諦との關係で規定される隨眠であると言える。

差し當たり欲界繫の他界遍行隨眠を除き、以上の見苦・見集所斷の遍行隨眠と見滅・見道所斷の無漏縁の隨眠を、先の見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・見道所斷の有漏縁の隨眠と合わせて、それらの關係を圖示すれば、次の圖1のようになる。

圖1（矢印はその隨眠が矢印の先のものを所縁としていることを示す）



この圖1から分かるように、見苦・見集所斷の遍行隨眠と見滅・見道所斷の無漏縁の隨眠は、その所縁及び斷じられ方のいずれにおいても四諦との直接的な關係で規定される隨眠であり、必ずしも見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・

(19) 能縁の隨眠が斷じられることで所縁の隨眠が斷じられるというこの斷じられ方においては、能縁の隨眠を遍行因または同類因、所縁の隨眠を等流果とし、能縁（遍行因または同類因）が斷じられることで所縁（等流果）が生じなくなるという關係を意圖していると解せざるを得ない。この斷じられ方とその問題點については別稿にて取り上げる豫定である。

見道所斷の有漏緣の隨眠を要しない。一方、見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・見道所斷の有漏緣の隨眠は、その所緣及び斷じられ方のいずれにおいても、直接的には見苦・見集所斷の遍行隨眠と見滅・見道所斷の無漏緣の隨眠との關係によって規定される隨眠であり、四諦との關係は先の遍行隨眠または無漏緣の隨眠を介するという點で間接的である。これを見所斷の隨眠の構成という觀點から見れば、見苦・見集所斷の遍行隨眠と見滅・見道所斷の無漏緣の隨眠は、それが無ければ見所斷の隨眠そのものが成り立たない本來的な隨眠であると言える。これに對し、見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・見道所斷の有漏緣の隨眠は、それが無くとも見所斷の隨眠が成り立つ副次的な隨眠であると言える。この見苦・見集所斷の非遍行隨眠と見滅・見道所斷の有漏緣の隨眠、卽ち見所斷の貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠の副次的な位置付けは、先に確認した阿含・ニカーヤの敎說において貪・瞋・癡の三つが預流果を得る爲に斷じられる煩惱（＝見所斷の隨眠に相當）に含められていなかったことを考慮すれば、本來それら四つの隨眠が預流果を得る爲に斷じられる煩惱にはなく、有部が阿含・ニカーヤを素材として九十八隨眠を整備する際に見所斷の隨眠の中に後から含められたことを反映しているものと推測できる。

4. ま と め

以上、九十八隨眠の主要な起源であると見られる阿含・ニカーヤの行位に關わる煩惱說において、貪・瞋・癡の三つが一來果ないし阿羅漢果を得る爲に弱められる、または斷じられる煩惱（＝修所斷の隨眠に相當）には含められる一方で、預流果を得る爲に斷じられる煩惱（＝見所斷の隨眠に相當）には含められていなかったこと、そして有部の見所斷の隨眠の中で、その阿含・ニカーヤの貪・瞋・癡に由來すると見られる貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠が、その他の遍行隨眠及び無漏緣の隨眠に對して副次的な位置付けを與えられていることを確認した。この二點から、有部の敎說における見所斷の貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠は、有部が阿含・ニカーヤの敎說に基づいて九十八隨眠を整備する際に、預流果を得る爲に斷じられる見所斷の隨眠に敢えて付加されたものであると推測される。

今後の課題としては、何故にそのような付加が行われたのか、卽ち貪・瞋・慢・無明の四つの隨眠は見所斷の隨眠におけるその副次的な位置付けから察せられるように、見所斷の隨眠を所縁とする場合が想定されたことにより、見所斷の隨眠にも含められたのか、それとも何か別の理由により見所斷の隨眠に加えられたのか、この間の事情を明確にする必要がある。

一次文獻

AKBh	Abhidharmakośabhāṣya: Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu. Ed. P. Pradha. Patna, 1967.
D	デルゲ版西藏大藏經
P	北京版西藏大藏經
SN	Saṃyuttanikāya (PTS)
T	『大正新脩大藏經』大正新脩大藏經刊行會
Tib.	西藏語
眞諦譯	眞諦譯『阿毘達磨俱舍釋論』T29, No. 1559.
『衆事分阿毘曇』	求那跋陀羅・菩提耶舍譯『衆事分阿毘曇論』T26, No. 1541.
『順正理論』	玄奘譯『阿毘達磨順正理論』T29, No. 1562.
『雜阿含經』	求那跋陀羅譯『雜阿含經』T2, No. 99.
『婆沙論』	玄奘譯『阿毘達磨大毘婆沙論』T27, No. 1545.
『發智論』	玄奘譯『阿毘達磨發智論』T26, No. 1544.
『品類足論』	玄奘譯『阿毘達磨品類足論』T26, No. 1542.

二次文獻

Frauwallner［1971］

Erich Frauwallner. “Abhidharma-Studien III. Der Abhisamayavādaḥ.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für Indische Philosophie* 15 (1971): 69-102.

池田［1980］

池田練成「百八煩惱成立の意義」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』12 (1980): (36)-(52).

加藤［1982］

加藤純章「阿羅漢への道」『佛教思想　8　解脫』京都、平樂寺書店、1982, 149-192.

小谷・本庄［2007］

小谷信千代・本庄良文『倶舍論の原典研究　隨眠品』東京、大藏出版、2007.
櫻部［1955］
櫻部建「九十八隨眠說の成立について」『大谷學報』35 (1955): 20-30.
櫻部・小谷［1999］
櫻部建・小谷信千代『倶舍論の原典解明　賢聖品』京都、法藏館、1999.
田中［2005］
田中教照『初期佛教の修行道論』東京、山喜房佛書林、2005.
藤本［2014］
藤本庸裕「見所斷の隨眠における貪・瞋・慢・無明」『印度學佛教學研究』63-1 (2014): (158) - (161).

〈キーワード〉九十八隨眠、見所斷、遍行、非遍行、無漏緣、有漏緣